

記録集

(コメンテーターによるコメント・パネルディスカッション)

Forum 早稲田まちづくりセミナー#09
早稲田都市計画フォーラム

コンパクトシティと拠点づくり withコロナ・afterコロナ時代の拠点のあり方とは



野嶋 慎二
福井大学教授



松浦 健治郎
千葉大学准教授



内田 奈芳美
埼玉大学教授



北原 啓司
弘前大学教授



浅野 純一郎
豊橋技術科学大学教授



佐藤 滋
早稲田大学名誉教授



山村 崇
早稲田大学講師

11/21(土) 14時～16時半

Zoom 配信

□主旨

新型コロナウイルスが猛威を振るう中で、人々が集まる場の重要性が益々、高まりつつあります。本セミナーでは、2020年10月に学芸出版社から出版される予定の『コンパクトシティと拠点づくり』を素材として、執筆者から書籍の紹介・拠点の役割とプログラム・拠点の連鎖とまちなか編集・中山間部の暮らしを支える拠点についてご講演いただいた後、コメンテーターを交えて、with コロナ・after コロナ時代の拠点のあり方について議論します。

□話題提供者（発表順）

野嶋 慎二（福井大学教授）

松浦 健治郎（千葉大学准教授）

内田 奈芳美（埼玉大学教授）

北原 啓司（弘前大学教授）

浅野 純一郎（豊橋技術科学大学教授）

□コメンテーター

佐藤 滋（早稲田大学名誉教授）

山村 崇（早稲田大学講師）

□プログラム

- 1) 趣旨説明（野嶋 慎二）
- 2) 書籍の紹介／with コロナ・after コロナ時代の拠点についての問題提議（松浦 健治郎）
- 3) 拠点の役割とプログラム（内田 奈芳美）
- 4) 拠点の連鎖とまちなか編集（北原 啓司、八戸市）
- 5) 中山間部の暮らしを支える拠点（浅野 純一郎、飯田市）
－休憩 10分－
- 6) コメンテーターによるコメント
- 7) パネルディスカッション～with コロナ・after コロナ時代の拠点のあり方とは

登壇者紹介（登壇順）

□話題提供者



野嶋 慎二（福井大学学術研究院建築建設工学専攻教授）
博士（工学）。1960年東京都生まれ。1984年東京大学工学部建築学科卒業。1998年早稲田大学大学院博士後期課程建設工学（建築）専攻修了。2005年から現職。



松浦 健治郎（千葉大学大学院工学研究院建築学コース准教授）
博士（工学）。1971年岐阜県生まれ。1994年早稲田大学建築学科卒業、1996年早稲田大学大学院修了、三重大学助教などを経て現職。共著書に『まちづくり教書』（2017年、鹿島出版会）など。



内田 奈芳美（埼玉大学人文社会学研究科教授）
2004年、ワシントン大学修士課程修了。2006年、早稲田大学大学院博士課程修了。博士（工学）。金沢工業大学環境・建築学部講師などを経て、現職。主な著書に『金沢らしさとは何か』（2015年、北國新聞社、共著）『都市はなぜ魂を失ったか』（2013年、講談社、翻訳）など。



北原 啓司（弘前大学大学院地域社会研究科研究科長）
博士（工学）。1956年伊勢市生まれ、東北大学大学院工学研究科博士課程単位取得。著書に『空間を場所に帰るまち育て』（2018年、萌文社）、『まち育てのススム』（2009年、弘前大学出版会）ほか。



浅野 純一郎（豊橋技術科学大学大学院教授）
1968年生まれ。豊橋技術科学大学大学院修士課程修了、2015年4月から現職。博士（工学）。共著書に『都市縮小時代の土地利用計画』（学芸出版社、2017年）など。

□コメンテーター



佐藤 滋（早稲田大学名誉教授、早稲田都市計画フォーラム代表顧問）
工学博士・都市計画家。早稲田大学の教育プログラムを2017年3月に退職し、現在、総合研究機構都市・地域研究所をベースに、都市・地域デザイン及びまちづくりに関わる研究活動、自治体との共同研究プロジェクトを進めている。



山村 崇（早稲田大学高等研究所講師）
1980年京都府生まれ。1999年早稲田大学建築学科卒業後、IT企業勤務を経て、2014年早稲田大学大学院博士課程修了。博士（工学）。早稲田大学建築学科講師などを経て、2019年より現職。主な著書に「無形学へーかたちになる前の思考ー」（水曜社／共著）ほか。

(1) コメンテーターによるコメント

拠点や人が集まる場所を作り出していく技術や体制が随分と整ってきて、例外的なものではなく、現実全国いろいろな所で起きている

最近は新型コロナウイルスの問題で、「ソーシャルディスタンスを取れ」と言われているが、民族によって距離感や集まり方が異なっているので、マナーの問題ではない

こういう時代になってくると、集まり方や、人とつながった、活動することの好き嫌いがあることが分かる

コロナ禍の時代になると、拠点の多くの機能がなくなるため、何が残るかを考えるべき

集まり触れ合いながら重要なことが起きてくる萃点のような拠点、ガバナンスの拠点、人が集まって楽しむ拠点、その3つくらいは残るのでは？

佐藤 いろいろな事例が出てきていて、まちづくりもここまできているのだと感じ、非常に心強いです。このような拠点や人が集まる場所を作り出していく技術や体制が随分と整ってきて、例外的なものではなく、こういうことが現実全国いろいろな所で起きていて、とても面白いと思います。

ただ、最近は新型コロナウイルスの問題で、「ソーシャルディスタンスを取れ」と言われています。フィンランドでは新型コロナウイルスの流行があまりなく、私たちは生活のマナーがちゃんとしているから感染症があまり拡大しないということを、フィンランドの方々がニュースで言っていました。我々が学生のときにエドワード・T・ホルの『かくれた次元』という本があったのですが、その最初の口絵に出ていた写



佐藤 滋（早稲田大学名誉教授）

真では、北欧の人たちはバスの停留所でも 1.5 メートルぐらい離れていました。何を言いたいかというと、民族によって距離感や集まり方が異なっているので、マナーの問題ではないと思うのです。ホールもそのようなことを書いています。われわれの世代の人はみんな読んでいます。

先ほど、八戸市や飯田市が出てきましたが、飯田市は人と議論するのが好きな人が多いです。八戸市でも、あのように集まって活動するのがものすごく好きな人が多いと思います。こういう時代になってくると、集まり方や、そういうことを通して人とつながり、活動することの好き嫌いがあることが分かります。先ほど飯田市の市民性ということが出てきましたが、そういうことも随分と関係している感じがしました。祭りだとみんなすごく盛り上がりますが、平常のときはとても静かで、静かにしているほうが好きな人たちもいます。

この間、二本松市で浪江町の人たちが町外コミュニティをつくっている石倉団地という所へ行ってきました。天気がいい日でしたが、自転車置き場で年配の男性が湯を沸かし、椅子を並べていました。女性が多かったのですが、周りから 10 人ぐらい集まってきて、のんびり話をしていました。何もないけど集まっているという、そういうのも集まり方の一つだと思います。集まり方や、そういうものを通して活動することは場所によって、県民性や市民性によって違いがある気がします。その辺りをいろいろな所で経験している方々に伺ってみたいと思いました。北原先生にお聞きするのなら、弘前市と八戸市では違うのでしょうか？、そうでもないのでしょうか？

また、拠点にもいろいろな意味があると思いますが、一つには集まって活動することを促進する場ということもあると思います。もう一つは、先ほどセンターという言葉も出てきましたが、拠点がガバナンスの中心という感じがあります。要するに自治の中心という意味です。指令を出すということもあり、中心があり、ある種の統合する場所のようなイメージも拠点という言葉にはあったと思いますが、最近はあまり好まれなようなので、いろいろなものが多様にあり、それがネットワークし、連鎖していくのがいいということだと思います。

このようなコロナ禍の時代になってくると、そのようなものの多くの機能がなくなってくる気がします。そうすると何が残るのでしょうか。僕は今、話していても、受けているのか受けていないのか全く分かりません。今みたいな話をすると、普通なら反応があるのですが、全く分かりません。北原先生がとても面白い話をしていますが、どんなふうを受けているのかも分かりません。視線というよりも、息遣いが感じられないのです。ここは絶対に残ると思います。

南方熊楠が萃点（すいてん）という言葉を使っています。萃点とは人が集まり参じてという、どこかの校

歌みたいですが、集まって触れ合って、また動きながら、そこに中心があるわけではないのですが、そういう場所が徐々にできてくるということです。先ほど、自律的に、自然に、ボトムアップでという言葉がありました、そういうものをどのように最終的に残していくのかということです。要するに情報や人が集まるということではなく、触れ合いながらそこに何か重要なことが起きてくるということで、これは恐らく県民性や民族性というものと関係なく大事にされ、最後まで残ることだと思います。

そういうものと、ガバナンスの拠点としてのセンターというものと、人が集まって楽しむような場所というものと、三つぐらいが拠点という言葉にはあると思います。萃点的なものがどのように演出され、あるいは生み出していけるのかということが、今の話を伺いながら、次の課題ではないかと感じました。

松浦 佐藤先生、ありがとうございました。今話の延長上で、この後のパネルディスカッションも展開したいと思います。それでは山村先生、よろしくお願いします。

余白、マージンのようなものをデザインすることの重要性

特段の目的を持たずに行ける場所になること

ロードサイド型の拠点の可能性

新しい産業を生み出す場としての拠点やまちなかの可能性

山村 今日の話を聞きながら、拠点づくりにおいて、私なりにポイントだと思うことが4点ありましたので、話します。

1点目は余白、マージンのようなものをデザインすることの重要性です。拠点が持続的に機能していくためには、市民にサービスを提供することだけでなく、市民の活動意識を呼び起こし、事を起こすことが非常に重要だということが一つの共通認識として語られたと思います。例えば最後の飯田市の事例でも、非常に

小規模な拠点ですが、暮らしを支えるような切実な活動の場になっていて、そこで事が起こり続けているということだと思います。そのためには、空間に隙間なく機能が割り当てられていくような近代的な発想ではなく、いろいろなことに使える余白、マージンが大事ではないかと、話を聞いていて思いました。マチニワというのも半屋外の新しい余白空間の在り方ですし、野々市市の例も少し出しましたが、レストランではなくシェアキッチンという言い方をしているのも、そういうことの提案として入ってきているのはある種の機能的な余白だと思います。

機能や目的がこうだと指定された空間は、特定のことをするウエルドゥーイングには効率的なのですが、よい時間を過ごすウエルビーイングとしては不向きだと思いますし、また事前の想定を超えたような、真の創造的な活動の場にはなりにくいと思います。適切な余白を意識的に用意することで、拠点が市民の活動力を引き出し、結果として持続をしていくことが可能ではないかと思いました。

2点目は、特段の目的を持たずに行ける場所になることが一つの鍵だと思います。今日、紹介された拠点も、いずれも利便施設の集合というよりは、空間体験の質的な魅力が高いように感じました。スーパーなどの利便施設があると、当然、人は明確な目的を持って集まってくるのですが、本当に強いのは、特に用事がなくてもあそこに行きたいと思わせるような、いわば無目的の目的地になるようなことだと思います。

都市部でも地方部でも、居心地がいい場所のニーズは根強いので、用事がないときでも足が向く場所は町の大切な財産になっていきます。そこからさらに、町中の回遊が生まれていっていることが大切だと思います。そういう意味では、拠点が利便性以外の価値をどのように提供できるかを考えていくことがとても重要だと思います。

3点目は、ロードサイド型の拠点の可能性をどう考えるかを悩みつづ、感じていました。既に都市が薄く広く拡散してしまっていますが、これから自動運転やテレワークなどでさらに拡散していく圧力が強まると思います。その際に、地域によっては現実的な解として、ロードサイドに車でアクセスできる拠点を形成していくことが、ますます否定できなくなってくると



松浦 健治郎（千葉大学准教授）



山村 崇（早稲田大学講師）

思います。当然、最初にイメージできるのは大規模なショッピングセンターですが、そのような巨大単一店舗の拠点というのは持続性の面でも疑問があるので、どちらかというと中小規模の商業が集積しているような、ロードサイド銀座のようなものが所々ありますが、そういったものを想定しながら、車社会対応型の拠点のベストプラクティスが蓄積していくことは意義深いと思います。その際に、伝統的な中心拠点との住み分けが恐らく問題になります。例えば、郊外にはどちらかというと現役世代向けの機能を担わせて、中心市街地にはいわゆる歩き回れる商店街や医療、福祉機能など、全世代的なニーズを受け止めさせるような役割分担がきちんとできるということであれば、ロードサイド型をこれからいろいろトライしていく可能性はあると思います。

4点目に、今日はあまり触れられなかったかもしれませんが、私自身が着目しているのは、新しい産業を生み出す場としての拠点やまちなかの可能性です。都市がこれからコンパクトに集約化していく中で、にぎわいを生み出すことはもちろんですが、それだけではなく、地域産業の視点からも有効です。これからは郊外や地方都市の拠点こそ、新しい産業の面を育てていく大きな可能性があると思っています。その際に、当然、その地方都市には都心にはないいろいろな産業資源があります。地場産業や農業も含めて、あるいは文化的な自然的な資源もあるわけで、そういったことを活かすこともできると思います。

さらに、図らずも新型コロナウイルスの影響でリモートワークが普及してしまったので、ひょっとするとこれからは都心でなくても働けるのではないかという機運が、一部の人たちですが出てきています。そういった動きも受け止めつつ、新しいアイデアに出合う場や、共同の場、あるいはテレワークだと家で息が詰まってしまうので、そこから退避する場としても拠点が果たす役割は大きいと思います。これからのアフターコロナを見据えて、町のしつらえを考えていくときに、シェアオフィスもそうですし、チャレンジショップもそうですが、フレキシブルなワークプレイスを作り出すことも拠点に求められていると考えています。きょうの話を聞き、また本も拝読した中で私なりにポイントではないかと思うこと、感じたことを4点挙げました。

松浦 山村先生、ありがとうございます。佐藤先生、山村先生からコメントをいただきましたが、いずれもウイズコロナ・アフターコロナ時代の拠点の在り方、後半のパネルディスカッションにつながるような話だったと思います。ありがとうございます。

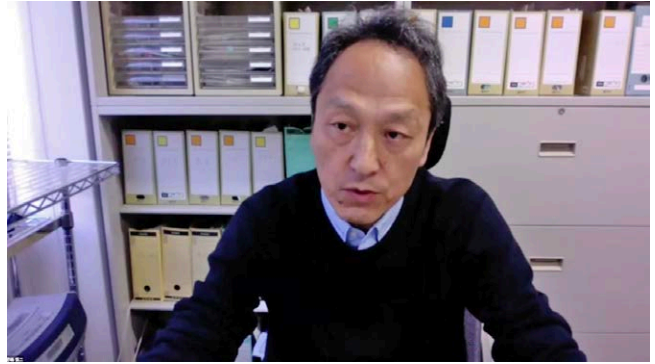
(2) パネルディスカッション ～with コロナ・after コロナ時代の 拠点のあり方とは

松浦 それでは引き続き、後半のパネルディスカッションに移ります。後半はウイズコロナ・アフターコロナ時代ということで、今はウイズコロナの時代だと思いますが、拠点にどのような変化があるのか、どのような問題が出てきているのか、新しい可能性はどのようなものがあるのか、あるいはこれからどのような拠点が必要とされているのか、それはこれまでの拠点とどう違ってきているのかということについて話を伺いたいと思います。

佐藤先生からは集まり方に国民性や県民性の違いがあるのではないかとということで、弘前市・八戸市・飯田市など様々な場所で集まり方の違いがあり、それが拠点の形成、拠点づくりにも影響を及ぼしているのではないかという話がありました。あるいはガバナンスの中心としての自治、指令や統合としての自治の話もありましたが、その中でどういった拠点がこれから残っていくのか、これが先ほどの後半の話です。

山村先生からは余白のデザインという話があり、これは事を起こしていくということで、前半の事例の中でいろいろ出てきていました。恐らくこの余白のデザインは、これからのウイズコロナ・アフターコロナでも重要だと思います。次に空間の質ですが、利便性以外の拠点の価値をどうつくっていくのかという話がありました。ロードサイド型の拠点の可能性の話もありました。本の中では、大型ショッピングセンターも拠点になるのではないかとすることに触れていますが、山村先生の話では、そういった大型ショッピングセンターではない小さな拠点を想定されています。現役世代がそういったロードサイドで拠点をつくっていくのではないかとということだと思います。それから新しい産業を生み出すような拠点もこれから求められて、リモートワーク、シェアオフィス、ワークプレイス、そういったものをどうつくっていくのかということも、ウイズコロナ・アフターコロナ時代に求められてきていると思います。

パネルディスカッションを始めたいと思いますが、前半と同じ順番で、野嶋先生から今の話について、お考えをお聞かせてください。



野嶋 慎二（福井大学教授）

買い物、余暇、通院、飲食、こういったものを控えている状況なので、今後は衣服、飲食の補てんがどうなっていくのかは非常に心配な状況です。そういったものが集積している所が拠点だと思いますので、最近はとても心配です。

一方で公民館のように人の集まる所は、例えばオンラインで健康体操をするなど、新しい技術を活用して、補完的にコミュニティーを維持している所もあり、とてもいいことだと思っています。今後、そのようなオンラインや新しい技術が進んだときに、拠点はどうなっていくのか、変わっていくのかということですが、やはり人が集まるのが拠点だと思います。ただ、集まる目的などは多少変わってくるという気もしています。今までは集まって仕事をする、商品が集まっている、情報が集まっているなど、何か利便性や効率性を求めてものが集まっていたのが拠点だという気もしますが、そうしたものがなかなか新型コロナウイルスのために集まり切れないので、オンライン化で代用できる、デジタル化で代用できるところも出てくると思います。

先ほど、佐藤先生もおっしゃいましたが、もう少し体験ができる、人と会える、あるいはライブなものに触れられて居心地がよいということが拠点の魅力になってくると思います。先ほど、堀を活用したサンクンガーデンに人が集まり、フェスティバルを行っている様子をご紹介しましたが、そうした所に今でも人は集まっています。効率的ではない体験ができるような場所、人が集まる所、肌感覚で生活の豊かさが享受できるといいますか、そういったものがこれからの拠点としてあると思っています。

松浦 ありがとうございます。内田先生、如何でしょうか。

人が集まるのが拠点

体験ができる、人と会える、ライブなものに触れられて居心地がよいということが拠点の魅力になってくる

人と人が会うことは、バーチャルな機能を持っていたとしても、現場で会うことはやめないという特性は必ず存在する

こういう状況にある中で、自己反省の機会を持ちながら、本当の拠点や、人

野嶋 これからどういう問題があるかということですが、拠点に限らず、大変、厳しい状況だと思います。例えば

が集まるとは何なのかを考え直すきっかけの中で、よりよい拠点がつくられていくと考えることもできる

内田 私はどうしても疑問に思うのですが、何であれば残るのかなど、なぜこんなにも過度にディストピア的な議論になるのでしょうか。デザインセンターの話もそうですが、拠点を運営していく中で、その状況に合わせてそれなりにいろいろ工夫をしながらやっています。先ほど話したアーリの話ではないですが、結局、人と人が会うことは、バーチャルな機能を持っていたとしても、現場で会うことはやめないという特性は必ず存在しています。何とか工夫をしながら拠点としての機能を続けていく努力をしているというのが、今の段階だと思います。

終わる、終わらないというのがどういう基準なのかは何とも言えませんが、ある程度、落ち着いてきたときに何が起るかということ、今の拠点の在り方と大幅に大きく変わるというよりは、われわれは今、こういう状況にある中で、自己反省の機会を持ちながら、本当の拠点や、人が集まるとは何なのかを考え直すきっかけの中で、よりよい拠点がつくられていくと考えることもできると思いました。

日本ではないのですが、今、はやっていることで、15分であらゆる機能にアプローチできるフィフティーンミニッツシティという考え方ができているのも、今までの生活と拠点的な機能に対する関係の反省みたいなものがあらためて突き付けられた中で、どのような都市が理想的かを考える契機となったということはあると思います。早く落ち着いてほしいとは思いますが、繰り返すと過度にディストピア的な考え方で拠点を捉える必要はないと思います

山村先生がおっしゃっていた郊外型の話ですが、私の説明が十分ではありませんでした。野々市市で話をしたと思っていましたが、野々市市では、先ほど紹介した施設の周辺では無印良品やオーガニックショップ、図書館など、車で割と回れる拠点性が存在しています。先ほども言いましたが、緊急事態宣言中も続けていろいろなことをしていましたし、ドライブスルーによる機能など、郊外型の車社会の中での拠点の在り

方は継続して存在していました。やはりそれは必ず必要だと思いますし、そのときに二分対立法的に中心と周辺ということではなく、中心が存在しない都市も郊外型にはかなりありますので、ロードサイド的な拠点の回遊性など、在り方自体がある種の中心性を持った形で機能している状況もあることをお伝えしておきます。

松浦 ありがとうございます。北原先生、よろしくお願いします。

交流人口ではなく関係人口を考えていくべき

ポストコロナの時代に我慢しなければいけない中、どれだけ自分の気持ちを持続させながら、出掛けていきたい気持ちを強くしていくかということが一番大事

北原 北原です。僕の考え方は、先ほどの内田さんの考え方に近いです。拠点というのは基本的に人が集まることで成立してきたわけです。コロナ禍の時代にどう考えるかということではなく、実際に行きにくくなった、人が集まってもすぐそばで話すことをためらわなければいけなくなった、ソーシャルディスタンスのソーシャルという意味は一体、何だろうと僕は時々、思っていました。もちろんその意味は分かりますが、話すことをソーシャルというのなら、社会とは何だろうという気がしています。

そういう意味でいうと、今までは交流人口というものにすがってきました。中心市街地も観光客を含めて、あるいはインバウンドを含めて、交流する人たちが来ることがその地域の盛り上がりや、あそこの場所はすごいという話につながったわけです。でも実際は、それこそ本当に今、関係人口を考えなければいけなくなっていると思います。行けない人であっても、その地域を、その場所をすごく好きな人がいるわけです。そこに今は行けなくなっている、でもそこに本当は行きたい、ウイズコロナの時代はそのポテンシャルをずっと我慢しながらためていく時代だと思



内田 奈芳美（埼玉大学教授）



北原 啓司（弘前大学教授）

います。しかし私たちは、今日のシンポジウムもそうですが、リモートを含めて離れている人間がリアルタイムで話す機会を持つことができる時代になってきたことが分かりました。

先週、大船渡で高校生が中心の勉強会がありました。先ほどの佐藤先生の話ではないですが、リモートで高校生の反応が見られないのが一番怖かったので、僕は岩手から近いと思い、怖くないと思い、行って30人近くの前で話をしてきました。もちろんそのシンポジウムはリモートでもやっていました。でもそのときは目の前にあの子たちがいたので、受けたところと、落ちなかったところは両方ともすぐ分かりました。目を見て話をすることがとても大事でした。そのよさを、今、この時代にウイズコロナで我慢して、耐えているところです。でも、そこでポストコロナに向けて、出掛けていく楽しさ、人の前に行く楽しさ、あるいは集まっていく楽しさというものや、出掛ける気持ち、人と会う気持ち、あるいは集まる気持ちを育てていくのが今の時代だと前向きに考えたくになります。

皆さまも関係していると思いますが、私たちは4月からついこの間まで講義ができませんでした。全てリモートでした。しかし、10月に初めて講義に行ったとき、大学の人間になって授業をした1回目と同じぐらい緊張したのと同時に、楽しかったです。たとえ寝ていたとしても、自分の話をしっかり聞いていたとしても、反応が分かるのが僕はうれしかったです。

場所というものは、関係していくということでも十分いい意味での関係を持っています。関係人口として考えていけば、もちろんそこにこだわりを持ち、それに対して思いがある人たちと一緒に仕事をしたいという意味からいうと、関係人口はとても大事です。クラウドファンディングというのはもろに関係人口だと思います。いろいろな意味での関係人口に自分の関係性を広げていますが、でも実際に出掛けていく、そういう人口になっていくというのが拠点だと思います。

かつて五所川原市で克雪ドームを作るときに、審査員に内井先生や仙田先生がいたときに、冬になると雪の多い所なので、ドームの屋根が閉まるという案が出てきたときに、僕が「この案はいいですよ」というと、2人の先生が、「さすが北原さん。弘前に行ったから雪をしっかりと守るという意味で、屋根付きの運動場がいいのですね」と言いました。僕は「先生、2人とも違います。僕らは11月から3月まで我慢しているのです。3月が過ぎて4月になった瞬間に、このドームをばんと開けて岩木山を見たいのです」という話をしたのを、先ほど思い出しました。それと同じで、行けなくても、僕はずっと関係性を持っているから行きたいのだというポテンシャルを持っているのが東北だと思います。

佐藤先生から先ほど、同じ地域でも弘前市と八戸市は違うのかという話がありました。微妙に違うと思います。もしかすると農業の弘前市と海でしっかりやっ

ている八戸市の違いがあるかもしれません。作付けに失敗すると出来がよくないという意味で、しっかり計算していかなければいけない津軽と、もしかしたらでかいものに当たるかもしれないという海の考え方が、もしかすると祭りにも影響しますし、その雰囲気によりワークショップでも創発的なことが出やすいのは八戸市かもしれません。両方とも、それぞれのうまいところを使って粘り強いのは同じ特徴です。両方とも我慢しながらずっとやってきました。僕が関わった弘前市では、25年間かけてレンガ倉庫の美術館が完成しましたし、八戸市も15年、20年とかけて町がどんどん動いています。どちらも大好きです。

そういう意味でいうと、ポストコロナの時代に我慢しなければいけない中、どれだけ自分の気持ちを持続させながら、出掛けていきたい気持ちを強くしていくかということが一番大事だと思います。もし出掛けていったら、拠点は本当に関係人口をもっと超えて、私の場所だと言えるような空間になっていくという気がしています。

松浦 北原先生、ありがとうございます。続きまして浅野先生ですが、1点質問が来ています。浅野先生の発表に近いので紹介しますが、よろしければこの質問にもお答えください。「地方都市には既存の多くの拠点があります。例えば公的には市民センター(公民館)が地区ごとにあり、共的にはNPO法人の活動拠点があり、私的には個人の住宅に集まって交流するケースもあります。これらの既存の拠点の活用、連携と、新たにつくる拠点との関係はどのように考えられているのでしょうか?」という質問がありました。よろしくお願いします。

アフターコロナで深刻に考えて変わろうという場所と、全く影響がなかったのも今までどおりそのままでもいいという場所に二極化する

目的が多様化したような小さな拠点の場が増えていくかもしれない

浅野 私は今年の6月か7月に別の目的で、かなり大きなアンケート調査をやる機会がありました。全国の自治体から、200～300件返ってくるアンケートでした。質問の中に、新型コロナウイルスによりどのような影響があったかについて聞きました。半分まではいきませんが、かなり大多数の自治体で、特段、影響はないという回答がありました。地方の都市だと思いますが、飯田市もそうですが、外から入ってくる人に対しては慎重であって、自分たちの中で普通にやっていたら大丈夫だという感覚があると思います。

今回の議論も、アフターコロナで深刻に考えて変わろうという場所と、全く影響がなかったのも今までど



浅野 純一郎（豊橋技術科学大学教授）

おりそのままいいという所と二極化するのではないかと感じています。ちなみに飯田市は、今もそうですが、テレワークをしている人はいないと自治体の人は言っていました。そんな設備を持っていないということだと思います。

それから佐藤先生のご指摘で考えたのですが、恐らく飯田市の人は、例えば、まちづくり委員会で議論するときでも、大多数で集まって慎重に議論を何回も重ねてから動くという感じではないと思います。キーになる人たちが2、3回の話し合いをしてから、話す前に、決める前に、とにかく動いてみようということが多いです。もちろん、たくさんの人が集まって集会をする場合は離れて座ったり、窓を開けたりすれば済むことですが、話し合うより動くというのが飯田流という気がします。

今後、影響があるとなると、アンケートの結果でも一部の自治体から出たのですが、就業形態や消費形態が変わるのであれば、今後の用途地域なども変えないといけなのではないかという回答もありました。そういうことでテレワークが進んでいくとすると、大きな拠点よりも小さな拠点、コミュニティー拠点という話が内田先生からもありましたが、触れ合いなど、何人か人と人の感じ方が味わえるような、目的が多様化したような小さな拠点の場が増えていくかもしれないと思います。

もう一つは、移住で郊外居住をしたいということで、調整区域の居住のニーズが高まると、調整区域にも拠点があるのではないかという回答もありました。いずれにしろこのような新しい変化が、今までの立地適正化計画の枠組みとどう整合して、どこがずれるのかという問題があるので、私の考えとしては、なるべく集約化を進めていき、立地適正化計画のフレームの中に収まるような工夫を入れて、現行の計画を維持するような感じのほうがいいと思います。

先ほどの質問の新しい拠点の話については、どの種類の新しい拠点をつくるのかという問題もあると思いますが、既存の拠点がアクティビティー系のものだとするならば、そういうものを関係させて新しいものが成立するというのが非常に合理的だと思います。そういう観点でいうと、新旧の拠点は関連付けられる契機が多いと思います。

松浦 ありがとうございます。ひととおり皆さまから意見を伺いましたので、それらの意見を整理します。まず野嶋先生の意見では、新しい技術が導入され、拠点でもプログラムなどが変わってきていて、集まる目的も変わってくるのではないかと。また利便性、効率性というよりは、むしろ体験や人と会えること、ライブ感などがとても重要になってくるという話でした。

内田先生の意見は、こんなことを議論する必要があるのかということかもしれませんが、現場で会うことはこれからもやめられないということ。今は制約がありますが、拠点の機能をこれからも続けていくしかないということ。新型コロナウイルスについては我々も冷静に反省をし、本来の拠点の在り方、在りようを考える機会をくれたのではないかと話でした。また山村先生の話からだと思いますが、中心が存在しない拠点というもあり得るという話でした。

北原先生の意見は、内田先生と同じような意見で、そもそも集まることで拠点は成立すること。またソーシャルディスタンスのソーシャルは何なのかという話もありました。これまでは交流人口で育ってきたわけですが、関係人口を考えていかなければいけないのではないかと。一方、コロナ禍で離れている人間がオンラインでつながる時代にこれからはなっていくと思います。そういったものをうまく生かしながら、それでも集まっていく拠点というものの重要性を我々は再認識したということをおっしゃっていたと思います。

浅野先生はアンケートを採られたということで、新型コロナウイルスの影響はあまりないという回答が多かったという話でした。飯田市の事例では、テレワークもなかなかできないので、拠点も二極化が進んでいくのではないかと話でした。飯田市の場合はキーマンが話し合っ、まずはやってみようというのが飯田流だという話もありました。今後は小さな拠点が増えてくるのではないかと。市街化調整区域でも移住者が増えて、小さな拠点ができてくる可能性があるとおっしゃっていました。

ウィズコロナ、アフターコロナの時代で、本質的な拠点の在り方が変わるかという、私も変わらないと思っています。ただ、今はいろいろな制約が起り、あらためて拠点の意義みたいなものが浮かび上がってきているということは、皆さまがおっしゃっているとおりにだと思います。

これらの内容を踏まえて、もう一巡したいと思います。まずは、佐藤先生、お願いします。

リアルとバーチャルの世界が混然一体となってくるような世界になる

佐藤 アフターコロナは新型コロナウイルスを引きずることではなく、こういう世界を知ってしまったということだと思います。例えば現地調査でも、向こうに

人がいて、その人との関係の中、代理人のような人がいろいろなことをしてくれるので、かなりできてしまうのです。またバーチャルツアーでもすごく面白いのがどんどん出てきて、今までリアルではできなかったようなことが出てくるのです。

今日はこのような息遣いや、いろいろな会場の参加者の声が聞こえないこともあります。使い方をうまくすると、そういうものも克服されてくるのではないかと思います。それを知ってしまった後に、行動様式、都市との関わり、まちとの関わり、まさに人との関わりなど、それらがどのように変わってくるのかはやはり考え、想像しておく必要があります。また、この変わった手段をもっとうまく使いこなすことができ、リアルとバーチャルの世界が混然一体となってくるような世界になると思います。そうなったときに、今日の話題もどのように展開していくのか、あまり変わらないということはもちろんありますが、本質的なところで我々は別の世界を見てしまったというところはある気がします。

拠点づくりについても、どのような新しい地平が見えてきているのかというところを、ネガティブではなくポジティブに見ていくきっかけになる

松浦 佐藤先生、ありがとうございます。佐藤先生からお話があったように、アフターコロナ時代で何が変わるかというより、いろいろな可能性が今、広がってきているわけです。その中で、拠点づくりについても、どのような新しい地平が見えてきているのかというところを、ネガティブではなくポジティブに見ていくきっかけになるということだと思います。ありがとうございます。続いて、山村先生、お願いします。

1人でいても人の気配が感じられて、ある種、無言の交流が心地よいような、そういったものが重要

山村 先ほど、佐藤先生がホールの『かくれた次元』の話がされて驚いたのですが、私も自粛期間中に『かくれた次元』を何度も読み返していました。それは集うことの意味が揺らぐと思ったからです。私は、野嶋先生が何度もおっしゃった居心地ということが重要だと思います。居心地は不思議な言葉で、快適とも違うのです。快適は客観的に判断できるのですが、居心地はもっと主観的なものです。ウイズコロナの時代は特にそうですが、私は1人でいても人の気配が感じられて、ある種、無言の交流が心地よいような、そういったものが重要だと思います。

最近、卒論を書いている学生がウイズコロナの中で、1人で宮下公園に来ている人に聞き取り調査をしてくれました。みんなは口をそろえて、1人で家にこもっ

ているのは耐えられないと言うわけです。いろいろと話を聞いていくと、過半の人が、ここに来れば少なくとも誰かと空間を共有しているという雰囲気があり、他者の気配が感じられるから来たということを言っていました。言い方はいろいろですが、まとめるとそういうことです。もう少し細かく聞いていき、深読みすると、ある種の他人との間合いを楽しむ、ある種の縄張りの取り合いを楽しむ、目線が交錯する、宮下公園は仕掛けもよくできていて、上下で交錯が生まれるようになっています。そこで1人では得られない都市体験のような喜びを感じさせます。そういうことが重要だということが、少し分かってきました。

先ほど内田先生も、視線の交錯、弱い紐帯の重要性を指摘されていましたが、まさにそういう考え方をうまく取り込んで、パブリックスペースなり、拠点なりを、ウイズコロナのときは特に孤独を和らげるという役割も求められてくると思います。

実は他者の存在を感じられて居心地がいい空間というのは、新型コロナウイルスに関係なく、都市デザインの中で重要なわけで、こういったことを機に、さらに拠点の姿をバージョンアップし、アーバンデザインの方法をバージョンアップしていくことが重要だと思います。

松浦 山村先生、ありがとうございます。無言の交流が心地よいということで、例えばオンラインの飲み会は一時期、流行りましたし、私のゼミでもやりましたが、オンラインの飲み会では無言の状態が気になってしまいます。話さなければいけないと気を遣ってしまうため、私はあまり好きではありません。そういう意味ではフェーストゥフェースで会って飲んだり会話したりすることは、人と人との居心地といえますか、オンラインとは全く違うと皆さまも感じていると思います。野嶋先生は居心地に関してどのようにお考えですか。

外部空間をうまく使い、色々なイベントを行い、色々な主体がそこに集い、新しい生活様式を発信しているようなショッピングセンターは拠点となる可能性はある

野嶋 アフターコロナということで、必要のない移動に関してはオンラインで代用してもいいと思っています。必要のない会議もたくさんあるので、そういった意味では移動は少なくなってくる気がします。しかしそうではない体験ができる、居心地のいい場所、人と会える肌感覚というのは、人間として生まれている以上、どうしても社会的なものなので、やはりそれは欲しいです。そういうところで人々の生活の豊かさは味わえると思います。

先ほど、山村先生がロードサイド店の可能性があるのではないかとおっしゃいましたが、僕も可能性はあ

と思いますし、拠点となり得ると思います。ただロードサイド店もいろいろあり、例えば国道に列に並び、車で移動するような、無味乾燥な、いわゆる居心地によくないロードサイド店はなかなか拠点にはなりづらいです。ショッピングセンターでも外部空間をうまく使い、そこで色々なイベントを行い、色々な主体がそこに集い、新しい生活様式を発信しているような所は周りの店舗とも絡みながら、そういうことをしている所は拠点となる可能性はあると思いますし、僕は賛成します。

松浦 ありがとうございます。内田先生、如何ですか。

前後の会話や前後の無駄話のようなものが、人が集まって何かをつくるときに非常に重要

内田 松浦先生にはいろいろまとめていただいて感謝していますが、この議論をするのは無駄とまでは言っていない気がします。私の言い方が悪かったと思います。しかし、このような危機がある状況になると、どうしてもディストピア的な議論に引っ張られたくなるという気持ちはあると思います。とはいえ、ユートピアでもない、いいこともあれば悪いこともあります、拠点を運営する側にとっては、それでも何とかやっていかなければいけないというのが本当のところ。何であれば残るのかという切迫した議論を超えて、もう少し冷静に、現場でどうあるべきかを見ていく必要があるということで、先ほどはあのような形で言いました。

無駄な会議は要らないし、オンラインでいいのではないかという話には大賛成ではありますが、先ほど山村先生がおっしゃったとおり、何か創造性を高めることを考えたときに、会議そのものや、大学の授業そのものや、拠点でもシンポジウムそのものが大事というよりは、前後の会話や前後の無駄話のようなものが、人が集まって何かをつくるときに非常に重要であるということは、クリエイティブ・クラスの話もそうですし、先ほどのアーリの話もそうですが、そのようなことはいろいろな所でいわれています。悲観的に言えば、今はその機会を失っているということは言えると思います。調整をしつつ、なるべく目と目が合う状況の中でコミュニティやネットワーク資本をつくっていくことは、ほそぼそとでも、徐々に続けていかなければいけないと感じています。松浦先生、ごめんなさい。そういうことです。

松浦 いいえ。北原先生、如何ですか。

関係の仕方の多様性をしっかり受け止めるのが拠点であってほしい

北原 聞いていて思ったのですが、僕らは拠点というと、そこに人が集まってコミュニケーションを図りながら楽しく過ごすということをふと考えてしまいますが、中心市街地活性化の指数、いわゆる KPI（重要業績評価指標）のようなものも、交流人口が増加すると、人がたくさん集まってくる所では活性化していくということをいわれます。しかし本当のことを言うと、先ほどもおっしゃいましたが、1人で公園に行く人もいますし、その地域で、1人で時間を過ごしたいという人がたくさん集まるのも拠点なのです。拠点というのは人と離れていても構わないのです。僕はこういう時代だからこそ思ったのは、1人で出掛ける場所でも、十分、まちの中の拠点として気持ちのいい、居心地のいい場所というのはあるはずです。グループではなく、1人で行きたい人も世の中にはたくさんいると思いますし、都市にはその場所があります。その場所が何もないというのはづらいと思います。サードプレイスなんて格好つけなくてもいいですが、行きたい場所がある人は恐らく幸せなのです。

毎日の日常生活の中で、本当の自分の場所はどこかと考えたときに、そこにたくさん人がいなければいけないという密度の問題ではなく、関係の濃さだと思います。その関係の濃さというのは、もしかしたら1人でそこでものを考える場所かもしれません。

なぜこの話をするかという、前にワークショップで公園づくりをしたときに、市民の方々が集まり、公園ができたならここで何をしたいかを語り合いました。ここでフリーマーケットをやりたい、子どもたちはたくさん遊びたい、走り回りたいという意見があった中で、その日に参加した70代の男性が、「水を差すようで悪いけど、私はそういううるさいのは見たくない」と言いました。なぜかと聞くと、「私は公園で昔、うちのおばあさんにプロポーズをしたことがある」と言いました。2人でぼんやり星を見ながら、「結婚しねえか」と言ったそうです。1人で思いながら座ったり、2人で話したり、そのような静かな公園もあったと思いました。

拠点という言い方をすると、もしかするとそこでアクティビティーとして、刺激的なものを考えないといけなかったかもしれませんが、関係の仕方は実はいろいろあると思います。その多様性をしっかり受け止めるのが拠点であってほしいという気がします。新型コロナウイルスのことを考えると、出掛けにくくなっていますが、行く人は行きます。そういった意味ではこれからもずっとつながっていきますし、人と徒党を組んで出なくても構わないということで、それをにぎわいと言ってもいいと思います。それが交流人口ということではなく、あの人はあの公園に関係しているという形でもいいと思います。

松浦 北原先生、ありがとうございます。拠点は賑わなければいけない、人と交流しなければいけないということ

だけではなく、1人で静かに過ごすなど、いろいろな人がいろいろなことができる、多様性があることがとても大事だというご指摘だと思います。浅野先生、如何ですか。

密な状態でないと締まらないという場もある

浅野 今回のことで気が付いたこと、教訓、空間づくりに役立てられること、注意しなければいけないことというのは幾つかあったと思います。一つは、例えば感染者が若年層に問題がある、どこかの年代に問題があるといったような言い方がされたり、あるいは外から入ってくる人に注意しろといわれたり、差別的な見方をする環境が生まれたと思います。そのときに、われわれがどのように寛容でなければいけないかというのは、集い方や、ある空間をつくるときに根本的な問題ですが、あらためて考えないといけないことですし、そういう環境が生まれたと思います。

逆に、密な状態でないと明らかに締まらないという場や、先ほどの北原先生の話ではないですが、密でなくてもいいということに気が付いた機会だったと思います。例えばクラシックのコンサートや大相撲などは、人が入っていない所ですと明らかにおかしいのです。密でないと締まらないようなものもあります。例えば家の中ではいたたまれないので、公園に行って1人で本を読むなど、1人で何かをしていることが、あの人はおかしいのではないか、変なおじさんではないかと思われていたものが、それはそれでいいという見方になったような気がします。

同じ空間でも時間を変えて、何回か回転させて、時間を制約して使ってもらおうということも、密を避けるためにやられたと思います。そのような実験がなされたのも大きな機会だったと思います。

松浦 浅野先生、ありがとうございます。空間づくり、拠点づくりということで、空間面でいろいろなサジェスチョンをいただいたと思います。

ひととおりの話を伺ったので、ここからはフリーディスカッションにしたいと思います。何かご意見がある方はいますか。いかがですか。

益尾さん、最後の閉会のあいさつもありますが、聞いていていかがですか。

広場・道路などの外部空間が拠点のエリアでもかなり活用されている

拠点が箱物からまち全体に広がっている

益尾 最近の新型コロナウイルスの影響で非常に広がったのは、公共空間の外や広場、道路などが拠点のエリアで



益尾孝祐（愛知工業大学講師）

もかなり活用されてきたことの反転力がすごいと感じました。この本にも事例で紹介されていますが、拠点が何かの箱物というよりも、例えば福祉施設が町中にいろいろな形でどんどん埋め込まれていたり、もしくは図書館が町中に埋め込まれていたりというような、町丸ごとの取り組みというのものがすごく拠点的な動きで広がっていると感じています。いろいろなクリエイティブな取り組みが、拠点の取り組みとして、箱物から町全体のエリアに飛び火していっていると事象として感じています。

内田先生がディストピア的な話とおっしゃっていましたが、地方にとってはウイズコロナ・アフターコロナの時代は、人口密度が薄いというメリットで地方移住がこれからどれだけ進むのかということ、かなり期待的に思っています。その動きがこれからどこまで加速するのか、もしくは加速しないのかということも、拠点的な議論の中で気にしていたテーマでした。

山村先生のクリエイティブ産業の立地論では、地方都市に、カマコンバレーや神山町のようなクリエイティブ層が相当、立地のいい所に移住していくという動きがかなり加速していて、北原先生の関係人口の話にも関連すると思います。これからの時代を見越した人の移動が、ウイズコロナ、アフターコロナの時代にどこまで加速していくのかということも延長線上にある議論かと思いながら聞いていました。

松浦 ありがとうございます。確かに屋外空間の魅力化が注目されています。それは新型コロナウイルスのことがあってのことでしょうが、いろいろな所で取り組みがされていて、それがとても時代に合ってきていると思います。中心市街地はまさしくそうだと思いますが、八戸市も含めて、いろいろな所で箱物だけでなく、まちなか全体を美術館や図書館など、全体をつなげていき、全体が拠点だという考えは、恐らくこれからも続いていき、新型コロナウイルスの時代でもとても重要になってくる話と思い、聞いていました。皆さま、如何ですか。

かつては場所だった所をもう一遍、場所にできるのか

今まで手を付けてこなかった空間を場所にできるのか

北原 もしコロナという副題が付いていなければ、あの本ができた後に私たちが何を話したかという、恐らくこういう話をしたと思います。拠点には二通りの考え方があると思っていて、かつて拠点だった所やかつて場所だった所が空洞化したり、あるいは廃止などによって場所であり得なくなってしまうたりしています。一番分かりやすいのは、浅野さんが言ったような中山間地の、例えば小学校はそうですが、拠点だと思っていた空間がいつの間にか拠点ではなくなってしまうていく、それをもう一遍、場所にできるかといった議論がないと、小さな拠点はできていかない気がします。その状況をわれわれはしっかり見なければいけません。

一方、今まで場所ではなくて、ずっと置いてきぼりになっていた空間、手を付けなかった空間、分かりやすく言うと、僕が本で書いたオガール紫波がそうです。何もできなかった、開発の中で置いてきぼりにされた空間を、果たして私たちがもう一遍、そこを拠点にしていけるのか。拠点といっても、拠点のストックがあり、あるいはストックになり切れなかった拠点が、しかしそのときに活用になっていくのは、それに関係する人々の行為、行動があったときに、この地域ではこれが成立するかを考えなければいけないぐらい人が減っていくわけです。

しかし、拠点論は本当に今まで、すごい都心や、物がすごく集まる所を拠点といったのではなく、そういう意味での拠点を考えていくと、中山間地もそうですが、かつては場所だった所をもう一遍、場所にできるのか、あるいは今まで場所でなかった所を、これからは場所と言っていいというやり方があるような気がします。もともと拠点だったのに拠点でなくなっている時代に、そこをもう一遍、拠点にするのは誰なのか、何なのかという辺りを議論したいということを、新型コロナウイルスとはまた別の意味で思っていました。

松浦 ありがとうございます。今のご指摘は、八戸市のかつて会所場だった、あるいは地方都市の中心市街地で拠点性があつたものが、拠点性がなくなってきている所が相当あり、それらをもう一度、拠点にできるのかということだと思います。このことは八戸市に限らず地方都市の共通の問題だと思います。

北原 そうです。オガール紫波では、古い庁舎が要らなくなつてしまいました。それを置いておくこと自体がまちづくりなんだらうかという話がありました。民間に何かをさせるということを簡単に言える時代ではありませんでした。それを何とかしようとみんなで考えて、それをもう一遍、場所にできないかということで地域の人

たちと頑張っています。全て手探りでやっていますが、そういう拠点もある気がします。

空間が場所化するというのは帰属感が鍵になってくる

空間を場所化するときの帰属感的演出の在り方

内田 スペース、空間が場所化するというのは帰属感が鍵になってくると思います。もう一つの議論として、地方都市の中心市街地のように帰属感は強く持ちつつも、絶対数が少なくなってくるという話と、もう一方で、私の事例の大宮のような大都市では、もともと人数は多いものの、帰属感自体は少なく、掛け算でいえばどちらもちどちという状態はあると思います。そのため空間を場所化するときの帰属感的演出の在り方は、それぞれのやり方があると思いますが、先ほど私が少し見せたように、道路を利活用していいという今回の規制緩和が、大都市部での誰もが通り、空間として知っている所に場所として関与するきっかけをつくることにつながればいいと、都市部の解決方法については思いました。2種類のパターンの空間からの場所化というものの在り方があるのではないかと、北原先生の話聞いていて思いました。

松浦 ありがとうございます。今の話について、皆さまはいかがですか。

恐らく帰属感ということであると、飯田市の事例のように、過疎地域では非常に団結力があり、みんなで何とかしなければいけないということで、かなりまとまる一方で、内田先生がおっしゃったように、大都市であるさいたま市の場合では、人間の数は多いが、帰属感のない人も多いという中で、どういう形で帰属感をつくっていくのかという話ですね。そのような中でいろいろな取り組みを進めながら、いろいろなつながりをつくろうとしているということかと思いました。

集まらなくてもいいことはもっと増えるのではないのか

佐藤 先ほど松浦さんが、拠点が溶けていくような時代になっていくのではないかとおっしゃっていました。昔は非常に明確な拠点がありましたが、北原先生はそれを連携していくとおっしゃっていました。いろいろな所に拠点ができてきましたが、集まらなければできなかったことはあったので、集まる場所をつくることでした。今、議論をしているのは、こういう時代だけどやはり集まらなさと駄目だという話をしていますが、実は集まらなくてもいいことはもっと増えるのではないかと思います。先ほど視線が合わないと言

ましたが、今、視聴者の方々の顔は出ていませんが、別のシステムでは出すこともできるわけですね。今度は視線を合わせることもできるかもしれないし、うまく話すと、会議でもそうですが、聞いている方の視線が全部感じられます。

そういうことを考えていくと、集まらなくても済むことをどんどんそぎ落としていったときに、何が本当に残るのでしょうか。残るとするのは本質的に何かということで、本当に我々がリアルな世界の中で必要としているのは何なのかということを考えるのです。僕もかなり高齢なので、今は全く困っていませんが、困っている人たちはたくさんいると思います。学会の発表もオンライン化していますが、すごく勉強になり、あれで済んでしまうのですが、人と人の付き合いもできないし、若い人たちはあれでは困るわけです。そぎ落とされてきたときに、何が本当に拠点として、先ほど萃点の話もしましたが、そういうものとして必要なかを考える必要があります。そのための空間づくり、場づくりを先行して考えていく必要があると思います。

松浦 佐藤先生、ありがとうございます。確かに、我々は絶対に集まらないといけなかないかと、この集まりもそうですが、オンラインでの集まりで済むものも多くなっています。本当に会って集まる場と、オンラインでもいいものがどういう形で仕分けられていくのか、むしろオンラインで事足りるもののほうがこれからは増えていくだろうというご指摘だと思います。その中で、本当に重要なものこそリアルに拠点で集まって、何かしていく、それは一体何なのかということをおまわり考え過ぎてもよくないかもしれませんが、そういう時代といいますか、集まって何をしたいのか、どういう場だとそのように集まってくれるのかということを実際に考えなければいけない時代になっている気がします。

皆さま、最後に一言ずつお願いします。野嶋先生、如何ですか。

野嶋 今回のパネルディスカッションはアフターコロナでどうなるかという、どちらかというと極端な将来像を議論してきました。そこまで急に変わっていかないものだと思いますが、こういった議論の中で見えてくるものもあるということで、このディスカッション自体はいいものだと僕は思っています。

繰り返しますが、やはり人と人が会い、肌感覚で生活の豊かさを享受できる、そういった居心地にいい空間、あるいは社会的な仕組みなどがこれから必要になってくると思います。

松浦 ありがとうございます。それでは内田先生、お願いします。

内田 私も散々、話したので、一言だけ話します。いいも悪いも両方、フェアに見ながら、新しい考え方を身に付けていく必要があると思っています。

松浦 ありがとうございます。北原先生、お願いします。

北原 最後に言いたいのは、拠点の拠という漢字を見たときに、前から気になっていたのは手偏なのです。この漢字にどのような意味があるのかと、前に調べたことがありましたが、手で寄りすがっていくという意味がありました。僕は拠点を考えるときに、身体感覚といいますか、そこに自分が手を加えていくこともあるし、そこから手で何か持ってくることもあるし、そういう関係性を持ちたい、そういった場所のことを居心地がいいって言いたいと思いました。

松浦 ありがとうございます。浅野先生、お願いします。

浅野 都市の分散化の時代にあって、拠点をつくっていくのは本当に難しいというのが実感です。時間をかけて、関心を持ち続けることが大事だと、きょう、あらためて思いました。

松浦 山村先生、お願いします。

山村 先ほどの、そぎ落としていったときに、究極的に何が残るのかと私も考えたのですが、暫定的な記憶の蓄積というのが、空間の持っている力がすごく強いのではないかと考えています。しかもそれが再生できるということです。先ほど、宮下公園の人たちにヒアリングをした話をしましたが、その中に少なからぬ人が、渋谷を見下ろしたその町に、あそこであいうことをした、親に連れていってもらったデパートなどという話もしました。そういうことから、かなり居心地なるものを感じていました。こういうことは、やはり空間がトリガーにならないと再生装置にならないと思います。歴史的な市街地や、いわゆる中心市街地が持っている、何か我々が引き付けられるものも、そういうものがあるのではないかと、しかもそれをシェアしているということを感じました。

松浦 ありがとうございます。今日のパネルディスカッションでは、ウイズコロナ・アフターコロナ時代の拠点の在り方を議論してきました。この場で、それらをまとめるのは難しいですが、これから研究や実践を進めていく上で、非常に有益な示唆が多くあったかと思います。皆様、どうもありがとうございました。